

第3回委員会の検討事項

1 教育事業のイメージ明確化

- 1_1 PF組織が担う人材育成活動の具体例
- 1_2 研究機能、なりわい創出支援機能との関係
- 1_3 資金拠出先イメージ
- 1_4 活動費概算

2 組織形態の検討

南三陸町地域資源プラットフォーム設立に向けた基本構想提言書より

1_1 PF組織が担う人材育成活動の具体例

目的：地域で育った人材が地域に戻ってくる /
外から人材がやってくる

対象・学びのイメージ・効果：

対象	学びのイメージ	効果
主として 町内	小学校高学年	<ul style="list-style-type: none"> 森里海のつながり エネルギーの基礎 廃棄物処理から資源化への取り組み
	中学生	
	高校生	
	大学生	<ul style="list-style-type: none"> ドローンなどを用いた紹介映像製作体験 →全国的な現状と南三陸の取り組みを比較 起業化マインド養成講座 (課題の構造化、地域資源を活かした事業構想)
	社会人	<ul style="list-style-type: none"> いのちめぐるまち研修 実習を伴う基礎・先端研究体験プログラム インターン、客員研究員受入

1_1 PF組織が担う人材育成活動の具体例

小学生～中学生

真説・うんこドリル

- ・動物たちが野外でしたうんこはどうなるの？
- ・人間のうんこはどうやって処理してきたの？
- ・うんこは無駄なもの？

これらの疑問をひもときながら、植物→動物→微生物→植物の間の物質の循環、森里海ひとのいのちめぐる姿を、南三陸を題材に学ぶ。

（うんこドリルが大人気だが、うんこは自然の循環の一要素だという本来の姿を実感し、本当の意味でのうんこドリル完成させる。）

→派生して、

- ・Bioで受け入れている汚泥の話、
 - ・ゴミ処理の話、
 - ・田畠や川海との関わり
- などの深い理解へつなげる。



受講者のマインド変化

□汚いものは目の前から無くなればよい。



●物質はなくならない。

●形を変えてさまざまなルートに。

●ひとにとっての価値も変化する。



■もったいないから、活用しよう！



受講の効果

●いのちめぐるまちの意味を正しく理解

●資源化に取り組みまちの先進性を実感し、その一員であることに誇りをもてるようになる。

●家族や親戚に町を自慢する

1_1 PF組織が担う人材育成活動の具体例

中学生～高校生

南三陸の紹介映像をつくろう

- ・ 南三陸ってこんな町というのを映像作品に。
- ・ 外の町との違いはどこにあるかを分析。
- ・ 自分たちでシナリオ・絵コンテ・撮影・編集
- ・ ドローンなどの機材も活用。

例えば「修学旅行先での発表」という目標を設定し、自分の町の紹介映像を制作するという行為をとおして、町のことを深く知るきっかけとする。

⇒副次効果として

- ・ プレゼンのコミュニケーション力
- ・ 作品を創る上で必要な構成力
- ・ 撮影協力してくれる地元の方との交渉力などの向上が見込まれる。



受講者のマインド変化

- 南三陸は何もなくて嫌だなあ。
↓
- 具体的な目標を持って調べると、実は色々あるなあ。
- 大人もがんばってるんだ。
- ひとに伝えるのって面白いかも。
↓
- うちの町はこんなところです！



受講の効果

- 自信を持って住んでる町を語れるようになる。
- 比較して客観視できるようになる。

1_1 PF組織が担う人材育成活動の具体例

高校生～大学生（希望者のみ）

起業化マインド養成講座

- ・ 南三陸の産業の現状を現地見学＆ヒアリング
- ・ ワークショップで課題の抽出と構造化を体験
- ・ 明らかになった真の課題に対し解決策を考える

これらの過程をとおして、地域や組織が抱える真の課題をあぶり出す手法を習得する。また、その課題をどうやったら解決できるかを、経済、社会、生態系などさまざまな観点も交えて検討・提案することで、社会に役立つ事業の作り方を体感する。

⇒本講座は下記の事業と連携・連動して行うことを見定

- ・ 志津川高校魅力化支援事業
- ・ 創業支援事業
- ・ U-25TOHOKU ソーシャルビジネスコンテスト



受講者のマインド変化

- 地元にはつきたい仕事がない。
 - 困っていることを解決したら仕事になるかも。
 - 仕事の種は足下にたくさんある。
- 困りごとを解決できる力を付けて帰ってこよう！



受講の効果

- 仕事や事業はつくるもの、という考え方ができるようになり、職業選択の幅が広がる。
- 地域の真の課題を見いだす力がつく

1_1 PF組織が担う人材育成活動の具体例

大学生～社会人（専門分野を持つ人）

いのちめぐるまち研修

- ・循環のキーワードで南三陸を巡る。
- ・分野に応じた実習を組み入れ、理解を深める。
- ・取り組みの推進について議論・検討する。

震災により課題先進地となった町が、いのちめぐるまちを掲げ、先進的な取り組みを行うまでの過程を現地ツアーで理解する。

また、分野に応じて森林の土壤分析や、川の水質分析などの実習を取り入れ、理解を深める。

⇒この研修を導入と位置づけ、下記の活動に誘導する。

- ・専門的な実習プログラムへの誘導
- ・インターン受け入れ
- ・研究デザインによる南三陸での個別研究



受講者のマインド変化

□南三陸って何か進んでることがあるの？



●なんか、最先端かも。

●ここでしかできないことがありそうだ。



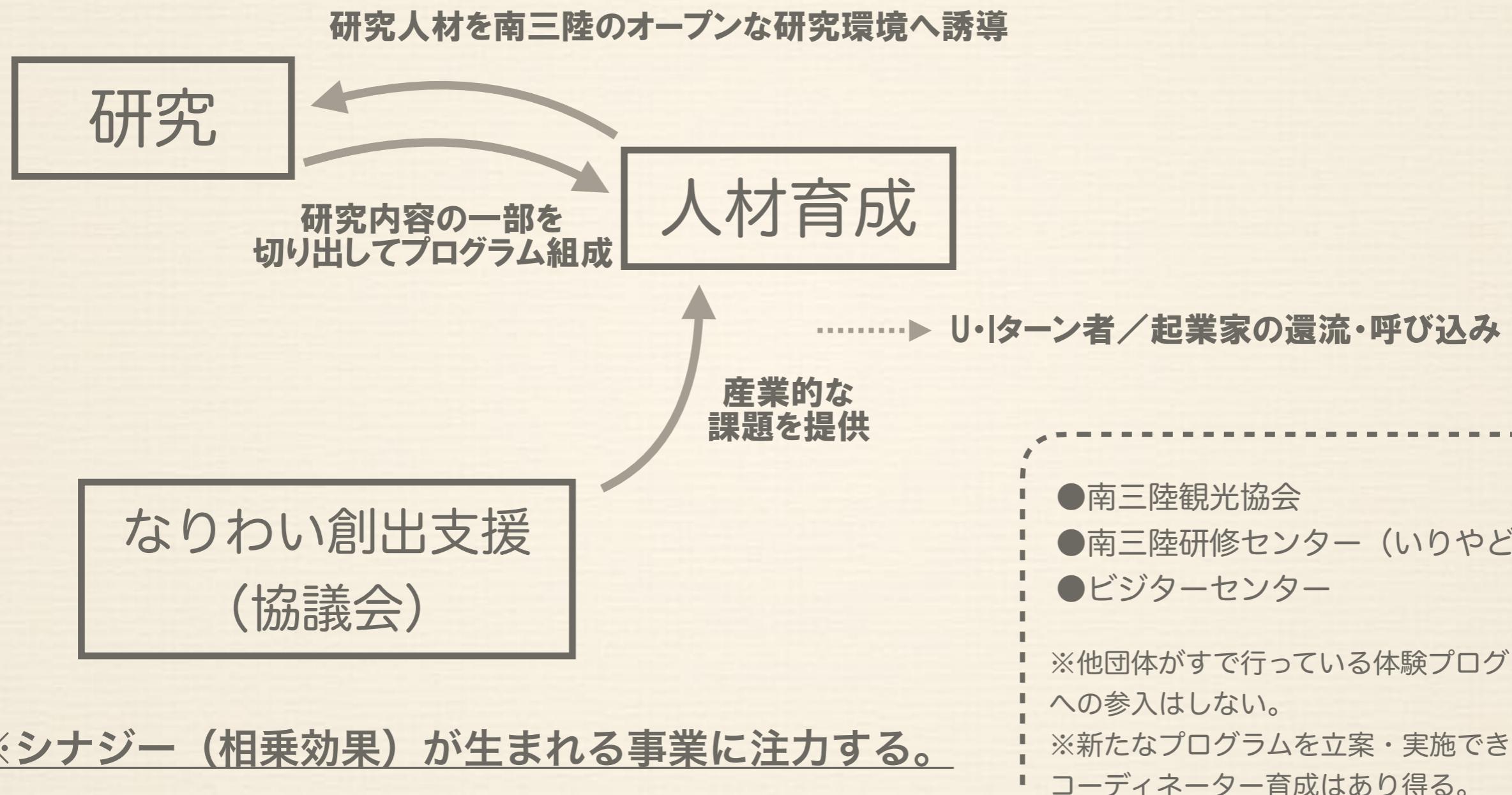
■フィールドとして使ってみたい！



受講の効果

- 地域モデルとしての優位性に気付く
- 専門分野での研究意欲が生まれる。
- ここで学べば他地域にも導入できるかも、という期待が生まれる。

1_2 研究機能、なりわい創出支援機能との関係



1_3 資金拠出先イメージ

地域に誇りを持つ（自慢できる）

町に戻ってきたいと思える

町で生きていくイメージが持てる

専門性を高める
(循環型社会の創り手の一員となる)



町の政策として必要不可欠な事業
(⇒ 主として町が負担)



受講者の負担が通常であるが
それでは広がりに限界がある



日本財団や企業等と協働で
資金調達＆プログラム実施

1_4 活動費概算

対象	学びのイメージ	費用積算
小学校高学年 5年生～中2	<ul style="list-style-type: none"> ・森里海のつながり ・エネルギーの基礎 ・廃棄物処理から資源化への取り組み 	<p>①</p> <p>プログラム実施 2h×3回×(2学年×5校+2学年×2校) =84 h</p>
中学生 中3	<ul style="list-style-type: none"> ・ドローンなどを用いた紹介映像製作体験 →全国的な現状と南三陸の取り組みを比較 	<p>②</p> <p>プログラム実施 2h×5回×(1学年×3クラス+1学年×3クラス) =60 h</p>
高校生	<ul style="list-style-type: none"> ・起業化マインド養成講座 (課題の構造化、地域資源を活かした事業構想) 	<p>③</p> <p>プログラム実施 3泊4日相当×5回 =24h×5=120 h</p>
大学生	<ul style="list-style-type: none"> ・いのちめぐるまち研修 	<p>④</p> <p>プログラム実施 3泊4日相当×5回 =24h×5=120 h</p>
社会人	<ul style="list-style-type: none"> ・実習を伴う基礎・先端研究体験プログラム ・インターン、客員研究員受入 	<p>(1回20名見当)</p>

プログラム実施時間数 $84h+60h+120h+120h=384h$

人件費 $384h \times 30,000\text{円} = 11,520,000\text{円}$

直接経費 $20,000\text{円} \times 72\text{回} + 300,000 \times 10\text{回} = 4,440,000\text{円}$

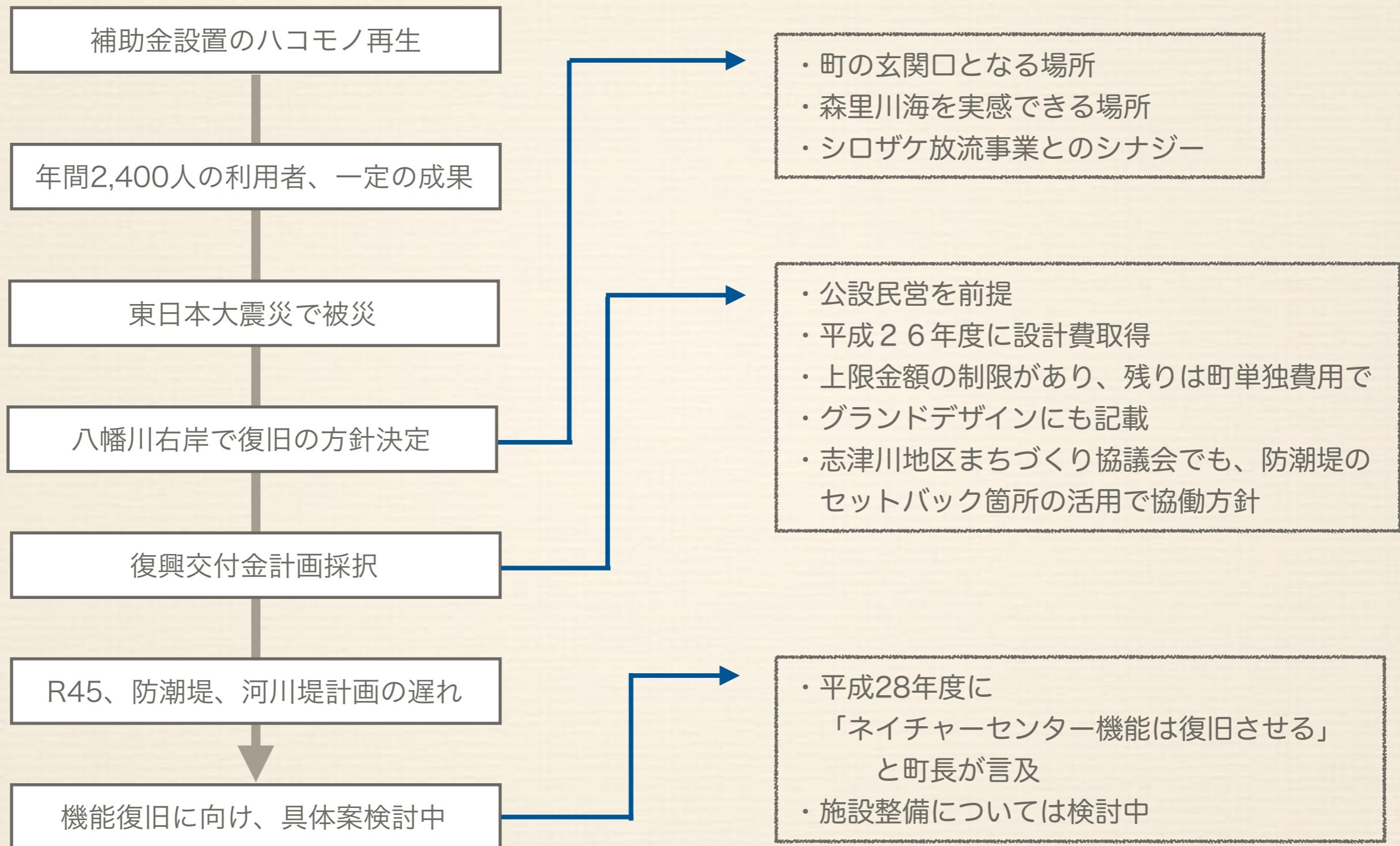
諸経費 $10\% = 1,596,000\text{円}$

小計 $17,556,000\text{円}$

消費税8% $1,404,480\text{円}$

合計 $18,960,480\text{円}$

参考資料1 ネイチャーセンターの経緯



参考資料2 ネイチャーセンターとPF 機能の違い

	自然環境活用センター	地域資源PF組織
運営主体	町（公営）	民営
建物	町（公設）	未定
運営方針	調整的	戦略的
研究機能	海洋生態学中心 外部研究者受け入れは限定的	海洋生態学 森林・里地生態学 森里海ひと循環 地域エネルギー政策等に拡張、 積極的な共同研究実施
人材育成機能	都市漁村交流が主軸 体験学習指導者養成	子ども達の地域への誇り醸成 U・Iターン者・専門家育成
なりわい創出支援機能	派生的 (ダイビング、教育旅行)	地域の事業者の意思 情報交換の機会重視

参考資料3 ネイチャーセンターとPFの関係

A



B

